

中 学 校

平成 29 年度

教育研究員研究報告書

道 徳

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究仮説	2
IV	研究方法	
1	研究構想図	3
2	仮説の検証	4
V	研究内容	
	〈指導例 1 : 第 1 学年 教材名「生まれてきてくれて、ありがとう—助産師からのメッセージ—」〉	5
	〈指導例 2 : 第 1 学年 教材名「違うんだよ、健司」〉	11
	〈指導例 3 : 第 1 学年 教材名「厳しい道を選ぶ—大村智博士—」〉	17
VI	研究のまとめ	23

研究主題

他者の価値観から学び、主体的に判断する力を育む 道徳科の授業の工夫

I 研究主題設定の理由

平成 27 年 3 月 27 日に学校教育法施行規則を改正し、「道徳」を「特別の教科である道徳」とするとともに、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領および特別支援学校小学部・中学部学習指導要領を一部改正する告示が公示された。道徳の教科化は、「特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にあるものと言わなければならない」、「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質である」との、中央教育審議会答申（「道徳に係る教育課題の改善等について」平成 26 年 10 月）を踏まえた「考える道徳」、「議論する道徳」への質的転換を図るものである。

現実の困難な問題に主体的に対処することのできる実効性のある力を育成していく上で道徳教育の果たす役割は大きく、個人が直面する様々な状況の中で、そこにある事象を深く見詰め、自分はどうすべきか、自分に何ができるかを判断し、そのことを実行する手だてを考え、実践できるようにしていくなどの改善が必要である。

学校における道徳教育は、「自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ことを目標とする教育活動である。道徳教育の要となる道徳科においても、「主体的な判断に基づいて道徳的实践を行い、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ことが目標である。道徳科において生徒の道徳性を養うためには、生徒一人一人が、道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、内面的資質としての道徳性を主体的に養っていく時間であるという道徳科の特質を十分考慮し、道徳科の特質を生かした学習指導を行うことが重要である。

以上を踏まえ、本研究では、「他者の価値観から学び、主体的に判断する力を育む道徳科の授業の工夫」に着目した。

道徳科の授業では、多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人として、また、国家・社会の形成者としてよりよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢が求められている。そのためには、道徳的価値に根ざした問題について主体的に自分との関わりで考え、どのように生きるか、どのように対処するのかといった行為の実現に向けて主体的に判断する力を養うことが大切である。そしてそのためには、観念的・一面的な見方から判断へと至るのではなく、他者と対話し協働しながら多様な価値観の存在を意識しつつ、よりよい選択を追い求めることができるようにする経験が必要である。そこで、生徒が他者の価値観から学び、物事を多面的、多角的に考えた上で、自己を内省し、自らの価値観をもち、道徳科の目標である人間としてのよりよい生き方を考えていける授業の工夫について、考察・実践・検証することとした。

II 研究の視点

1 教材の活用

道徳科の授業では、教材そのものを読み深めるのではなく、教材を題材とし、道徳的な課題を一人一人の生徒が自分の問題として捉えること、自分のよりよい生き方について考えを深めることを目指す。そのために、教材を基に自分たちの考えを出し合う話し合い活動と、自分の考えを深める活動を授業の中に設定する。これらの活動において、生徒が道徳的課題を自分事と捉え、考えを深めるためには、教材の活用の仕方にも工夫が必要である。例えば、手記やグラフやコラム、映像といった、短く端的な内容の教材の活用は、授業で話し合うべき課題について考えるきっかけを与える話題提示として有効である。また、伝記などのノンフィクション資料も、生き方の一つの在り方として示すことで、生徒に自身の生き方に生かせる部分を考えさせることができる。一方、登場人物の関係が複雑であったり、場面転換が多かったりする教材は、内容把握に時間がかかってしまうため、登場人物の心情を順に追っていくのではなく、考えさせたい課題を焦点化することが必要である。

2 話し合いを深める発問

生徒に様々な価値観から物事を多面的、多角的に考えさせるには、まず、生徒それぞれの価値観によって多様な考え、意見が期待できるような発問を設定する必要がある。生徒の発言を広げたり深めたりするための補助発問を取り入れることで話し合いを深める手だてとする。

3 話し合いを活性化する手だて

生徒全員に、自身の意見を明らかにし、自分自身を振り返らせる機会を与えるために、4人程度の小集団での話し合い活動を設定する。その後、学級全体で小集団での話し合い活動の内容を共有し、「考えを出し合う」、「まとめる」、「分類する」、「比較・検討する」ことを取り入れる。また、表面的な意見交換に終始させないために、補助発問をファシリテーターとしての教師が発することで、話し合いを深めさせることも必要である。

4 自分の考えを深める発問

話し合い活動を通じて、生徒は自分自身を振り返ったり、多様な見方や考え方に接したりすることができる。物事を多面的、多角的に考えさせた上で、自分自身のよりよい生き方について探求する発問を行い、個人で考えさせる時間を設定する。

III 研究仮説

—仮説—

自分と異なる考えと向き合う活動とともに、自分の考えを深める活動を設定すれば、道徳的な行為の基となる判断力につながる自らの価値観をもつことができるようになり、主体的に道徳性に基づいた判断を選択することができるようになる。

本研究では上記のように仮説を設定し、検証授業を行うとともに、その成果と課題について検証することとした。

IV 研究方法

1 研究構想図

「道徳に係る教育課題の改善等について」中央教育審議会の答申(文部科学省 平成 26 年 10 月)
「特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するよう指導することは、道徳教育が目指す方向の対極にあるものと言わなければならない。」
「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質である」



「道徳に係る教育課題の改善等について」中央教育審議会の答申(文部科学省 平成 26 年 10 月)
「考える道徳」「議論する道徳」への質的転換

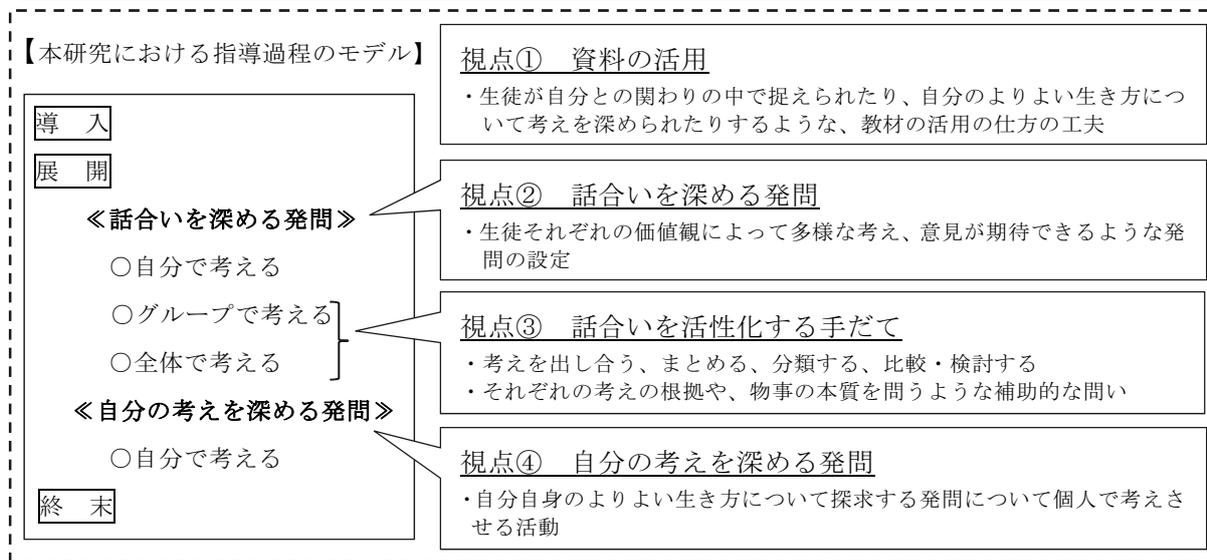
「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」(文部科学省 平成 29 年 7 月)
【道徳教育の目標】
「人間としての生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基礎となる道徳性を養う」

「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」(文部科学省 平成 29 年 7 月)
【道徳科の目標】
「主体的な判断に基づいて道徳的実践を行い、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」



研究主題
他者の価値観から学び、主体的に判断する力を育む道徳科の授業の工夫

—仮説—
自分と異なる考えと向き合う活動とともに、自分の考えを深める活動を設定すれば、道徳的な行為の基となる判断力につながる自らの価値観をもつことができるようになり、主体的に道徳性に基づいた判断を選択することができるようになる。



2 仮説の検証

展開においては、生徒一人一人の多様な考えや意見が期待できる「話し合いを深める発問」とよりよい生き方について探究する「自分の考えを深める発問」を取り入れた授業を計画し、以下のような検証授業を行う。

- 第1学年 主題 命を大切にすることとは (内容項目 D生命の尊さ)
教材名 「生まれてきてくれて、ありがとう 一助産師からのメッセージ」
(『特別の教科 道徳』移行措置対応 中学校版 東京都道徳教育教材集
東京都教育委員会 平成28年3月)

【話し合いを深める発問】

「他の人の生命を大切にするにはどうすればよいのでしょうか。」

【自分の考えを深める発問】

「自分の生命を大切にするとはどうすることなのでしょう。」

- 第1学年 主題 本当の友情 (内容項目 B友情、信頼)
教材名 「違うんだよ、健司」
(『中学校道徳 読み物資料集』文部科学省 平成24年3月)

【話し合いを深める発問】

「健司、耕平、僕に対して、共感できること、共感できないことは何ですか。」

【自分の考えを深める発問】

「本当の友情とはどういうものなのでしょう。」

- 第1学年 主題 偉人の生き方に学ぶ (内容項目 A希望と勇気、克己と強い意志)
教材名 「厳しい道を選ぶ」—大村智博士
(『特別の教科 道徳』移行措置対応 中学校版 東京都道徳教育教材集
東京都教育委員会 平成28年3月)

【話し合いを深める発問】

「なぜ人は、自分にとって『厳しい道』を選ぶのだろう。」

【自分の考えを深める発問】

「自分の人生を本当の『いい人生』にするためには何が必要だろう。また、それはなぜだろう。」

V 研究内容

<指導例1：第1学年>

- 1 主題名 命を大切にすることとは（内容項目D「生命の尊さ」）
- 2 教材名 「生まれてきてくれて、ありがとうー助産師からのメッセージー」
（『特別の教科 道徳』移行措置対応 中学校版 東京都道徳教育教材集」平成28年3月）

3 本時のねらい

生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重して生きようとする心情を育む。

4 指導観

(1) ねらいとする道徳的価値について

生命はかけがえのない大切なものであり、生命を尊ぶことは、かけがえのない生命をいとおしみ、自らもまた多くの生命によって生かされていることに素直に応えようとする心の現れと言える。また、他の生命を大切にするには、まず自分の生命の大切さに気付かなければならない。しかし、日常生活の中で生命の尊さを深く実感する機会は少ない。生きていることのありがたさに深く思いを寄せることから、自己以外のあらゆる生命の尊さへの理解につなげていきたい。

本検証授業では、このことを踏まえ、自らの生命の大切さを深く自覚させるとともに、自他の生命を大切にするためにはどうしたらよいのかを、他者の価値観から学び、自他の生命を大切にしていこうとする心情に迫っていきたい。

(2) 生徒の発達段階について

中学生の時期は、自己の生命に対するありがたみを感じている生徒は決して多いとは言えない。身近な人の死に接したり、人間の生命の有限性や、かけがえのなさに心を揺り動かされたりする経験をもつことも少なくなっている。

第1学年の時期は、小学生のときに比べ交友関係が広がる。その中で、次第に自我意識が強くなり、自立への意欲が高まってくる時期である。周囲との関わりの中で、自分が今ここにいることの不思議についても考えさせることで、生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重することについて、より深く学ぶことができるようになる。

(3) 教材の特徴について

ア 教材の活用

「生まれてきてくれて、ありがとうー助産師からのメッセージー」は、助産師の視点からの出産や、生命の尊さについての心情を描いている教材である。赤ちゃんを授かってから、母親の出産が命がけのものであることを知り、自分の親に感謝する気持ちと、生命の尊さを実感させることができる教材である。

イ 教材活用の視点

本検証授業では、生徒が生命の大切さについて改めて考えるきっかけを与えるための読み物教材を使用している。また、補助資料として映像資料を使用する。短い読み物教材ではあるが、生命を大切にすることについて、個人、グループでの話合いで考えを深められると考える。

5 本時の学習

	主な学習活動(○主な発問 ・生徒の発言)	・指導上の留意点
導 入	1 教材への導入 ○赤ちゃんの出産シーンを見たことがありますか。また、そのときの印象はどうでしたか。	・「人間はみんな、赤ちゃんとして生まれてきたことを確認する。
展 開	2 映像資料 ○映像資料について印象に残った言葉、場面はありますか。 ・出産のシーン ・赤ちゃんの出産直後の姿 ・お母さんの涙 3 教材「生まれてきてくれて、ありがとう」を教師が範読する。 ○他の人の生命を大切にするには、どうすればよいのでしょうか(話し合いを深める発問)。 1 自分の考えをワークシートに記入する。 2 グループ活動(4人一組) 3 全体で共有(グループの代表が発表) ・心や身体を傷付けないよう気を付ける。 ・相手を思いやる、理解する。 ・平等に接する。 ○自分の生命を大切にするとは、どうすることでしょうか(自分の考えを深める発問)。 ・毎日楽しく過ごす。 ・生まれてきたことに感謝して、悔いのないように生きる。 ・支えてくれる人の存在を感じながら生きる。 ・自分の命も他人の命も、同じ命だからこそ大切にしなければならない。	・助産師の坂本フジエさんの映像資料を再生する。生命誕生の瞬間を映像で見て、生命の尊さについて考えさせる。 ・映像や教材を基に、人の命について身近に感じているところで、どうすることが生まれた生命を大切にする事なのかを個人→グループで考えさせる。 ・話し合いを深めるために、机間指導の中で切り返しの発問を行っていく。 ・考えをワークシートに書き、全体で意見を発表させる。他者の考えを聞き、自分の考えをより深めていく。
終 末	4 本時のまとめ	・ワークシートに感想を記入する。

6 本時の評価

- ・かけがえのない生命を尊重するとはどういうことなのかを考え、自他の生命を尊重しようとする気持ちをもつことができたか。
- ・多様な価値観に触れることを通して、ものの見方や考え方を広げ深めることができたか。

〈ワークシート〉

道徳ワークシート

「生まれてきてくれて、ありがとう ～助産師からのメッセージ～」

1年 組 番 氏名 _____

- 1 他の人の生命を大切にするにはどうすればよいでしょうか？

○自分の考え

○話し合い活動後の考えや感じたこと

- 2 自分の生命を大切にすることはどうすることでしょうか？

- 3 今日の授業で考えたこと、感じたことを書きましょう。

ワークシート (A4 版)

生徒が自分の考えについてまとめ、グループの活動後の考えや意見を比較しやすいようにした。

7 指導の実際

実際の活動 【「他者の価値観から学ぶ」ための活動の実際】

「他の人の生命を大切にするにはどうすればいいのか」という発問に対し、まずは自分の考えをもたせ、その後に4人程度のグループ活動を行い、一人一人の考えや思いを発表し、互いの価値観について考えさせた。他者が発言した多様な価値観について、互いに認め合ったり、深め合ったりさせるために、友達の意見を聴き、自分が納得するものを考えさせ、納得した理由を大切にしながら話し合いを行わせるようにした。

個人やグループで考えてから全体へと広げることで、多様な価値観に触れ、価値について多面的・多角的な見方や考え方ができるように導いた。また、多様な価値観を引き出すために、発問の練り上げと繰り返し発問を工夫した。

「他の人の生命」について考えさせてから「自分の生命」についての発問を投げかけることで、生命の大切さをより深く生徒に実感させ、「自分の生命を大切にするためにはどうすればいいのか」ということについて、主体的に判断させることをねらいとした。

～生徒の発言より～

T：他の人の生命を大切にするには、どうすればよいのでしょうか。

S1：悪口を言わないようにします。

T：悪口を言わなければ、相手を大切にしていることになる？

S1：悪口を言うことで、相手のことを尊重していないことになるからです。

S2：相手を思いやることが生命を大切にすることに繋がるので、悪口を言うことは相手のことを思っていないと思います。

S3：他の人の生命の重みを考えることも生命を大切にすることだと思います。

T：命の重みとは、何について考えるのでしょうか？

S3：相手の嫌がることや、傷付けるようなことをしないことだと思います。

～生徒のワークシートより～

T：自分の生命を大切にすることは、どうすることでしょうか。

S1：家族に感謝をして生活すること。

S2：一人一人に寄り添い、優しく、平等に接する。

S3：友達と毎日遊んだり、やりたいことをして毎日を幸せに生きること。

S4：命は一人一つしかないもの。「楽しい、幸せ」と思えることが大切だと思う。

〈生徒のワークシートより〉

- ・いつもはあまり感じていなかったが、皆の意見を聞いて、人の気持ちを考えていると、自然と自分のことも考えられるようになることが分かった。他人の命を大切にしていれば、自分の命も大切にできるのだと強く思った。
- ・ふだんは「命」について考えることもなかったけれど、学級のみんなで話し合ったりすることで、周りの人に対して優しい気持ちをもって接していきたいと思うようになった。
- ・みんなで話し合っ、周りの人のことを思うことも大切だが、自分自身も大切に、無理をし

過ぎないことも大切だと思った。これからは友達と過ごす時間も大切に、一日一日を大事に後悔しないように過ごそうと思った。

上記のような感想から、グループや学級全体で、他者の価値観に触れることで、自分自身の考えが変化し、生徒たちがより深く「命」について考えることができた様子が見取れる。

【主体的に判断する力を育むための指導の工夫】

他の生命を大切にするためにはどうすればよいのか、グループ活動の中で互いの価値観を基に考え、改めて自分に問い直すことで、自己と向き合う機会を設定した。自己の考えと向き合った上で、他者の多様な価値観を知り、自己を見つめ直し、最終的にはそれらを通して人間として生きていく上で必要な道徳的価値を主体的に身に付け、自己の生き方について考えることができるような工夫をした。

グループ活動をすることで、他者の価値観を知ることができる。ここで他者からの考えや価値観を知ることが、自分の考えを広げ、自己の内省に深く関わるといえる。また、どのような言動が「他の生命を大切にすることなのか」を考え、自他の生命を大切にするためにどうしていくかを、主体的に判断する力を育めるようにした。

<生徒のワークシートより>

- ・自分の命も周りの人の命もみんな同じなのだから、どちらも大切にしていきたいと思った。
- ・改めて人の命の大切さが分かり、たくさんの人に感謝し、支えられるようになりたいと思った。
- ・与えられた命を大切にするためにはどうすればよいのかを考えて、周りの人にも支えてもらって、時には自分も周りの人を手伝いながら生きていきたい。
- ・今回の授業で、人が生まれてくるということは、思っていたよりも大変だと思った。だから、自分や周りの人の命を大切にし、親にも感謝していきたいと思った。
- ・自分の命、他人の命の大切さを改めて感じる事ができた。他人の命を変えることはできないが、大切にし、守ることはできる。だから他人が嫌がることをしないようにする。

上記のような感想から、本時の授業を通して、生徒が自分の生き方について考え、自分自身に固有の選択基準・判断基準を形成しようとする様子が見て取れる。また、本時の授業を通して、自身の変容を実感している生徒もいた。

<授業後の生徒の感想（抜粋）>

- ・前から、「命は大切だよ。」と聞いてきたが、よく分からなかった。今回の授業で、一つ一つの命を大切にするには、その命が幸せに生きられるようにすることが大切なのだと思う。
- ・生命が誕生する奇跡や、命の重みを知ることができた。人の命を大切にするには、相手を思いやる必要があると思った。一日一日生きていられるすごさを知り、感謝したい。
- ・他の人の命、自分の命はかけがえのないものだから、これからも命の重みを知りここまで生きてこられたことに感謝しながら生きていかないといけないことを改めて考えさせられた。

8 成果と課題

【「他者の価値観から学ぶ」ための活動の実践】

(1) 成果

話し合いを深める発問で、始めに他の人の生命について個人で考えた。どうすることが他の人の生命を大切にすることなのかを考え、グループで話し合い、他者の価値観に触れることで、より自分の考えを深めさせることができた。自身の考えを発表するときに、他者の意見を聞いて新たに考えたことを、自分の意見に付け加えて発表することができた生徒や、ワークシートで他者の言葉から新たな気づきを得ていた生徒がいた。命が大切だということは、生徒たちはもともと知っている。しかし、どうすることが、自分や他者の命を大切にすることなのか、他者の視点から学び、そこで学んだことを自分のものとし、改めて自分の考えを深めることができていた。

また、グループでの話し合い活動で出された意見を全体で共有する際に、生徒たちに問い返し、ねらいの本質に迫るような発問を学級全体に投げかけた。そうすることで、ふだん考える機会の少ない生命の大切さについて、改めて考えを深める機会ができたと感じていることが、授業後の感想から分かった。ただ生徒たちの考えを発表させ、共有するのではなく、更に考えを深めさせるような「なぜそう考えたのか」などの補助発問をし、全体で考えを深めさせることを通じて、生徒たちに自身の変容を感じさせることができた。

(2) 課題

他の人の生命を大切にするために何ができるか考えていく中で、グループの話し合いの中では他者の命を傷付けなければよい、という意見にとどまり、生徒たちだけの話し合いだけでは十分に考えを深められていない集団があった。机間指導の中で教師が切り返しの発問をして、話し合いを活性化させることを行ったが、それぞれのグループの中で、更に話し合いを深めさせるような、生徒同士でのやり取りがより多くなるような工夫が必要であった。

【主体的に判断する力を育むための指導の工夫】

(1) 成果

自身の考えを深める発問として、「自分の命を大切にすると、どうすることでしょうか」と、他者の生命を尊重することについて考え、改めて自分の生命について振り返り考えさせる発問をした。生徒たちの発言やワークシートには、自分自身の言葉で、自分の生命に対する思いが書かれており、今後の生活の中で意識していきたいことについて考えさせることができた。また、その中でも、本時の授業で出された自分以外の意見から影響を受けて、改めて自分の考えを深めているような発言や記述が見られた。

(2) 課題

これまで得てきた経験の差によって命の受け止め方は生徒により様々である。そこで、自分と異なる意見と向き合う活動を取り入れることで、その経験の差や価値観の違いを認め合いつつ、自分の視点と異なるものの見方を知る機会になると考える。道徳的価値に根ざした課題について、多面的・多角的に考察し、主体的に判断する力を育むことが大切である。

<指導例2：第1学年>

- 1 主題名 本当の友情 (内容項目B「友情、信頼」)
- 2 教材名 「違うんだよ、健司」(『中学校道徳 読み物資料集』平成24年3月 文部科学省)
- 3 本時のねらい

本当の友情とはどういうものなのかを考え、友達を信頼し、心の底から打ち解けて友情を築こうとする心情を育む。

4 指導観

(1) ねらいとする道徳的価値について

中学生になり活動範囲も広がり、新しい人間関係もつくりつつ生活する中で、ともするとささいなことから感情の行き違いが生じ、友情関係が台無しになることもある。本当の友情とは何なのか、自分は今のままでよいのか、などの複雑な思いにとらわれる場合もある。人間関係を気にするがゆえに、自分の考えを伝えることにためらいを感じている生徒も多い。

しかし、悩むことや葛藤することは、真の友情を追求していく上で大切なプロセスであることに気づき、乗り越えられるようになっていくことが大切である。3年間の学校生活で、互いに励まし合い、高め合うことのできる友情を育ませたい。

(2) 生徒の発達段階について

中学校の段階では、体験や学習の質が高まる中で、互いに心を許し合える友達を真剣に求めるようになる。心の底から打ち明けて話せる友達を得たいと願う気持ちが高まってくる。心から信頼できる友達を求め、友達への期待も強まると同時に、友達との関係に、時には悩み、友達であるからこそ意見がぶつかることもある。中学生は心身の成長は目覚ましいが、不安定な時期でもある。そういう時期だからこそ、友達を信頼し、自分自身も思いきって心を開き、友情を深めていくことが大切である。悩んだり葛藤したりすることを乗り越えることで、真の友情は培われていくものだということに気付かせたい。

(3) 教材の特徴について

ア 教材の活用

本教材は登場人物も多く、場面転換も多い。どうしても内容把握に時間がかかってしまうため、話し合い活動を充実させるための時間を確保するための工夫をした。まずは教師が範読しながら、登場人物の関係を黒板に図で示しながら視覚化した。登場人物の心情を順に追っていくのではなく、考えさせたい課題を焦点化し、発問を設定した。

イ 教材活用の視点

考えさせたい課題を焦点化し、発問を設定した。

(ア) 「適当に合わせた付き合いが最高」という「僕」について【共感できる・共感できない】

(イ) 「最近の耕平、少し変だ。もうそれ以上聞かない。」という「僕」について

【共感できる・共感できない】

(ウ) 何も詳しいことは言おうとしない「耕平」について【共感できる・共感できない】

(エ) 気になっていることを聞こうとする「健司」について【共感できる・共感できない】

これらについて、自分ならという視点からそれぞれ選んだ理由についてメモでまとめて発表するか、考えを直接発表してもよいことにし、小グループでの話し合いにつなげる。小グループでの話し合いは、他者の考えに触れて多面的・多角的に考える機会とする。全体で生徒の

意見を取り上げるときは、その根拠を丁寧に問い返していく。最後に再び個人で、本当の友情についてじっくり考える時間を確保し、考えを深められるようにする。

ウ 4人一組の小グループによる話し合い活動

今回は、教材の中の3人の言動や態度について、自分なら【共感できる・共感できない】を選び、それを選んだ理由を小グループ内で発表し合い、互いの価値観に触れさせる。

エ 学級全体での意見の共有

小グループで話し合った内容を学級全体で共有する。教師が意見を整理したり、理由について問い返しをしたりしながら、全体で考えを深めさせる。

オ 小グループの考えを深めさせる発問

小グループ、学級全体の話し合い活動のあとに、【本当の友情とはどういうものか】という考えを深めさせる発問に個人で向き合わせる。小グループや学級全体での話し合いで出された意見を参考に自分の考えを深める時間とする

5 本時の展開

	主な学習活動（○主な発問 ・生徒の発言）	・指導上の留意点
導 入	1 初めてできた友達のことを思い浮かべる。 ○何歳のときですか。どのようなことをして遊ぶのが好きでしたか。どのようなことでけんかをしたり、どのように仲直りをしたりしましたか。	・自分にとっての友達、友情の原点となる情景を思い出させる。 ・思い出しやすい年齢、遊び、印象的な場面を例に出させる。
展 開	2 教材「違うんだよ、健司」を教師が範読する。 ○自分の考えと比べて、「僕」や「健司」や「耕平」の考えや発言は、共感できるか、共感できないかを考える。（話し合いを深める発問） 1. 自分の考えをワークシートに記入する。 2. 小グループ活動（4人一組） 3. 全体で共有（小グループの代表が発表） 【僕】① <u>適当に合わせた付き合いが最高</u> （共感できる） ・嫌われたくない。よく思われていたい。いつも本心を使う必要はない。その方が楽だから。 （共感できない） ・自分の意見も言うべき。ルールなど相手に合わせるだけはよくない（掃除や自転車）。相手に頼っているだけだから。	・注目させたい場面を焦点化する。 ・自分の考えをワークシートに書かせる。 ・話し合いの中で、批判的な意見に偏らないように、自分の考えと比べさせながら共感的思考も大切にさせる。 ・ワークシートは、個人の考えをまとめるためのものであることを押さえ、話し合いでは、読み上げるような発表にならないように留意させる。

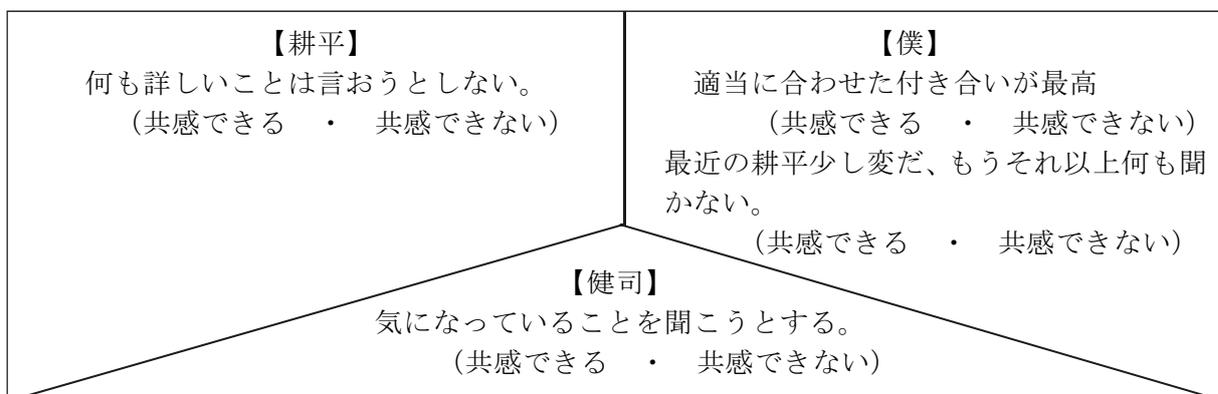
	<p>【僕】②最近の耕平、少し変だ…もうそれ以上何も聞かない。 (共感できる) ・聞き出す勇気がない。そっとしておいてあげたい。 踏み込み過ぎるのはよくないことだと思う。 (共感できない) ・気付いているならもっと声をかけるべき。遠慮をするところではない。本気で心配するならちゃんと話を聞く。</p> <p>【健司】気になっていることを聞こうとする。 (共感できる) ・本当に心配して言っているから。言わない(聞かない)と伝わらないから。 (共感できない) ・何でも聞けばいいとは思わない。強引だから少し距離を置きたい気持ちになる。</p> <p>【耕平】何も詳しいことは言おうとしない。 (共感する) ・言ってもどうしようもない。二人に心配をかける。 言いづらい。恥ずかしい。 (共感できない) ・友達が心配してくれているから話したほうがいい。 ○本当の友情とはどういうものなのでしょうか。 (自分の考えを深める発問) もう一度、個人で考えて自分のワークシートに記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・抽象的な理由が出てきた場合、その理由の根拠を問い返す。 ・生徒から出される多様な考えの基となる心について、どうしてそのように考えたのか、そこに至る過程を説明させるようにする。 ・本時の授業を振り返り、考えや気持ちをまとめさせる。
終末	3 授業で学んだこと、考えたことを振り返る。	教師の説話

6 本時の評価

- ・ 本当の友情とはどういうものなのかを自分のこととして深く考えることができたか。
- ・ 多様な価値観に触れることを通して、ものの見方や考え方を広げたり深めたりすることができたか。

7 板書計画

教材を範読しながら、3人の登場人物の言動や態度を黒板に図で示していく。視覚化することによって教材の内容把握がしやすくなり、考えさせたい課題を焦点化することができた。



8 指導の実際

検証授業を6学級で実施したうち、小グループでの話し合い活動を2パターン行い、自己の考えの深まりについて探った。**【自分と異なる意見と向き合う活動】**

ワークシート1 (パターン1) は、自分のワークシートを基に、4人一組の小グループで意見を交流させ、さらに全体に発表する形をとった。自分の意見をじっくりと整理してから話し合いを進めていけるが、個人で書きとめることに多くの時間を費やしてしまう傾向がある。

ワークシート1 (パターン1)

道徳ワークシート【違うんだよ、健司】 自分の考えと比べてみましょう。3人のそれぞれの考えや発言は「共感できる」か「共感できない」か、理由も書きましょう。

【僕】 ①適当に合わせた付き合いが最高。 【共感できる・共感できない】

友達の意見に適当に合わせた付き合いというのも分かるけれど、その付き合いが最高というわけではない。自分の意見と友達の意見の違うところがあれば、それを刷り合わせていくことでよい方向にいくと思うから共感はできない。

【僕】 ②最近の耕平少し変だ。もうそれ以上なにも聞かない。 【共感できる・共感できない】

人には言いたくないことがあるから、それ以上聞かない方がいいと判断することもある。そういうときは、「何かあったら相談して。」と声を掛ければいいと思うから、共感できる。

【健司】 気になっていることを聞こうとする。 【共感できる・共感できない】

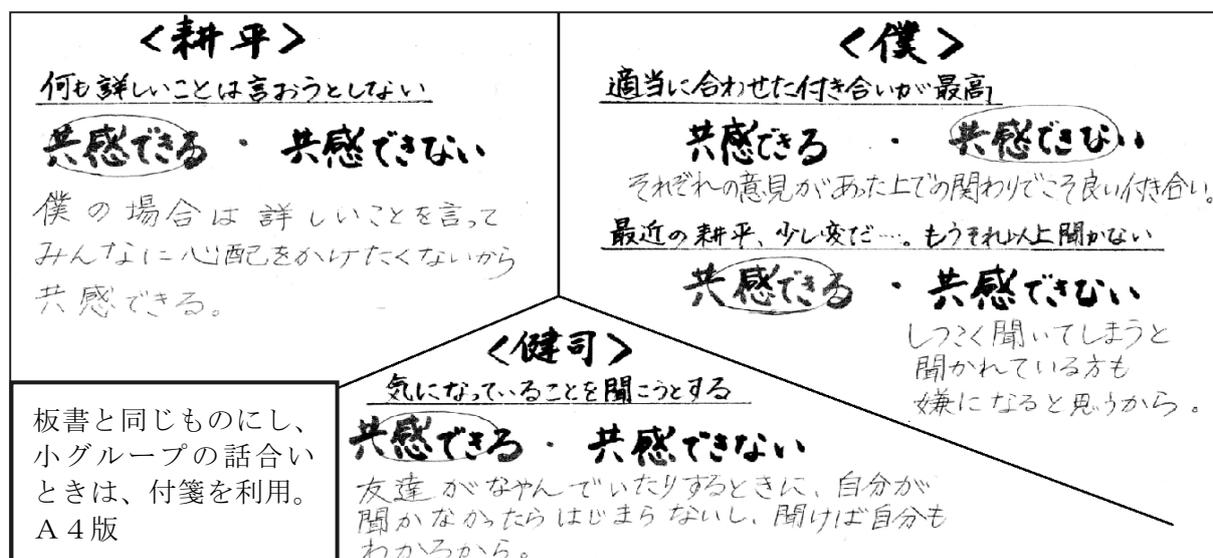
友達の様子が変なことに気付いたら、おせっかいでもいいから何があったか聞いてあげたいと思うから共感できる。

【耕平】 何も詳しいことは言おうとしない。 【共感できる・共感できない】

声を掛けた方がいい。自分の気持ちに共感してくれる人もいることが分かったら気持ちも楽になると思うから共感できない。

ワークシート2 (パターン2) は、板書と同じ形式のものを使い、キーワードなどを記入しながら話し合いを進めていける要素を多くした。小グループになったとき、班に1枚配布したA3版のワークシートに付箋で、共感できる：青、共感できない：赤を使用し、理由を説

明するコメントを書かせ、分類して貼らせていく作業を通じ、4人程度のグループで話し合いをさせた。色の違いで意見の違いが視覚的に分かりやすい。また、多様な理由も出しやすい。ただ、理由が多様なため、一つ一つ理由にじっくりと向き合う要素は減るように感じた。



どちらの話し合い活動をとっても、小グループの話し合いの後の自分の考えを深める場面において、顕著な差はみられなかった。小グループの話し合いで大切なことは、話し合いの形ではないことがうかがえる。クラスの実態に応じて、小グループの話し合い経験が浅い場合は、付箋を貼りながらという作業を含んだ方法が有効である。小グループに慣れ、話し合いが熟達していけばメモ程度の記述で自己の考えを示すなどのワークシートの使用が考えられる。

〈生徒のワークシートより〉

- ・人によって考えることが違っていて、自分とは反対のことを考える人もいるのだということが分かった。自分の中に、悩み事を聞くことによって、友情関係が崩れてしまうかもしれないという考えはなかったので、新しい発見ができた。
- ・落ち込んでいる人などへの対応を改めて知った。
- ・話し合っていくうちに自分の意見が変化していると思うことができた。
- ・改めて考えると、確かに聞き過ぎてしまう部分もあったと自分のことを見付め直した。

【自分の考えを深める活動】

小グループでの話し合い活動により、生徒は自分自身を振り返ったり、多様な見方や考え方に接したりすることができた。その後自分の考えを深める発問として以下の発問を設定し、自分自身の考え方、生き方について探求させた。

発問：本当の友情とはどういうものなのでしょう。

〈生徒のワークシートより〉

- ・困っているときには助け合ったり、悩んでいるときにはお互いに相談し合ったりできる。時にはけんかをすることもあるけど、仲直りできる。相手が悪くても、自分が悪くても、仲直りしたくなる。お互いがお互いを高め合うために、思っていることを言ったりできると思えるもの。
- ・相手も自分も大切にすること。そして相手を信頼できること。自分も打ち明けることができて相手も自分を信頼してくれること。一緒に泣いたり笑ったりできるもの。

- ・けんかもあるし、話が伝わらないときもある。それでも協力できるのが本当の友情だ。この授業を通して（みんなの意見を聞いて）私は、言いにくいことは言わない人だったけれど、しっかり友達と本音で話していくことが大切だと思った。

9 成果と課題

【「他者の価値観から学ぶ」ための活動の実践】

(1) 成果

小グループでの話し合いを設定したことで、生徒全員が小集団の中で、1回は自分の意見を発言し、また聞き手にもなることで他者の考えに触れさせることができた。生徒一人一人をしっかり課題に向き合わせることもできた。登場人物の中学生3人の言動のうち四つを取り上げ、その四つについて、自分ならどう感じるか、共感できる・共感できない、を選択させ、選択した理由について個人で考える過程で、スムーズに取り組む様子が見られた。話し合いにおいても、なぜ共感できるのか、なぜ共感できないのかと質問しやすかった様子が見られ、話し合いが活性化した。また、2択のうち反対の選択肢を選んでいる生徒に対して、他者の考えを理解しようと相手の考えを尊重しながら寄り添い、自分自身の考えの変容を自覚していた生徒もいた。

(2) 課題

表面的な意見交換に終始させないために、それぞれの考えの根拠や、物事の本質を問うような補助的な問いを、小集団の中における生徒同士、ファシリテーターとしての教員が発することで、話し合いを深めさせることが大切だが、今回の設定は情報量が多く（四つの言動についての共感できる・できない）4人組での小グループの話し合いの時点では、意見交換の一步先まで深めきれないで終わる小グループもあった。学級での共有の場面も同様に、ファシリテーターとしての教員の役割が果たしきれなかった部分が課題である。読み物教材の情報処理量の多いときに焦点化する工夫をしたり、話し合いでの目的を明確に示したりする必要がある。付箋など補助ツールの活用なども情報量の処理には有効であると考えられる。生徒が話し合いにどれだけ慣れているか、また教師が生徒から出てきた言葉を的確に切り返し、深めさせていくことができるかも大切な要素となる。生徒同士の話し合いの質を高めていくこと、教師の的確な問い返しなどのやり取りを今後も継続していくことが大切である。

【主体的に判断する力を育むための指導の工夫】

(1) 成果

小グループでの話し合い活動により、生徒は自分自身を振り返ったり、多様な見方や考え方に接したりすることができた。それを経た後、自分の考えを深める発問を投げかけたことで、自分との関わりの中で捉えること、自分のよりよい生き方について考えを深めることにつながったと実感している。

(2) 課題

多様な価値観から考え方の対立がある場合にも、誠実にそれらの価値に向き合い自らの力で考え、よりよいと判断したり適切だと考えたりすることが必要である。授業を通じて今後、生徒自身にその大切さを実感させていくことが必要である。授業だけにとどまらず、日常においても自分とは異なる価値観に触れ、物事の新しい見方や考え方を見だし、広げ深めていける自分に出会い、主体的に判断できる力を育み続けることが大切である。

<指導例3：第1学年>

- 1 主題名 偉人の生き方に学ぶ（内容項目A「希望と勇気、克己と強い意志」）
- 2 教材名 「厳しい道を選ぶ 一大村智博士」
（『特別の教科 道徳』移行措置対応 中学校版 東京都道徳教育教材集
平成28年3月 東京都教育委員会）

3 本時のねらい

より高い目標を設定し、それを達成することの大切さを理解し、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げようとする態度を育てる。

4 指導観について

(1) ねらいとする道徳的価値について

人間としてよりよく生きるには、目標や希望をもつことが大切である。その目標が遠大なものであっても、身近で日常的な努力によって達成できるものであっても、それが達成されたときには満足感を覚え、自信と次に向けて挑戦しようとする勇気が起こるものである。このような達成感は、次のより高い目標に向かって努力する意欲を引き出すことにもつながる。このことを積み重ねる中で、人生の理想や目標を達成しようとする強い意志が養われる。

本検証授業では、他者の生き方から学ぶことで、「挑戦することから逃げないで努力し続ける姿勢の大切さ」について考えを深めさせることをねらいとした。また、苦難に立ち向かいながら理想を追い求める姿から、心の強さの重要性にも気付かせ、よりよく生きようとする態度を育みたい。

(2) 生徒の発達段階について

中学校の発達段階では、自分の好むことや価値を認めたものに対しては意欲的に取り組むが、希望に燃え、将来に向けて大きな目標を立てるものの、理想どおりにいかない現実には悩み苦しむ生徒も少なくない。失敗や困難に直面して挫折し、簡単に物事を諦めてしまったり、それらを回避しようと安易な選択をしてしまったりすることもある。そのような生徒らに対し、「困難に負けず、厳しい道を進み挑戦し続ける」ことがよりよく生きることへとつながることに気付かせ、話し合い活動を通して、自分にとってよりよい生き方とは何かを主体的に考え、これからの自己の在り方を見付けさせたい。

(3) 教材の特徴について

ア 教材の活用

本教材は、ノーベル賞を受賞した大村智博士の人生を、よりよい生き方の一つの在り方として示すことで、生徒の自分自身の生き方に生かせることを考えさせることができる教材である。誰にでも自分の人生に満足を得ようと努力する姿勢はあるが、どこかで妥協したり楽をしようとしたりする面はある。そこで、「己の人生をよりよく生きるために厳しい道を選ぶことの大切さ」について考えることを通して、課題を自分事として考え、その後の自身の生き方に反映させられる考えを深めることができるよう課題を焦点化し、発問を設定した。

イ 教材活用の視点

考えさせたい課題を焦点化し、次のような発問を設定した。

(ア) なぜ人は、自分にとって『厳しい道』を選ぶのだろうか。

(イ) 自分の人生を本当の「いい人生」にするためには何が大切だろう。また、それはなぜだろうか。

(ア)の発問は、まず自分の考えをまとめさせ、それをもとに小グループで話し合い、他者の考えに触れて多面的・多角的に考えた上で、最後に自分自身の考えを再考し、課題に対して自分の考えを深めることができるようにする。(イ)では、直前の課題に対して考えたことをもとに、自分自身の生き方をじっくりと自分事として考えさせる。

5 本時の学習

	主な学習活動 (○主な発問 ・生徒の発言)	・指導上の留意点
導入	1 教材への導入を聞く。 大村智博士の紹介 (ノーベル賞受賞時の報道や、その当時の新聞記事から紹介する。)	・ノーベル賞受賞時の話や大村智博士の人生の転換点となる出来事とそこからの歩みについて紹介する。 ・大村智博士の発言から、どのような信念をもっているのかを考えさせてもよい。
展開	2 教材「厳しい道を選ぶ」を教師が範読する。 3 大村智博士の人物像に触れる。 ○なぜ大村智博士は、困難なことにも挑戦し続けられたのだろうか。 ・祖母の言葉を信じているから。 ・頑張っている生徒、研究者の姿を見たから。 ・自分に厳しく生きようと思っていたから。 ・成果が出るまで頑張り続ける人だから。 ・厳しい道を行けばいい人生になるから。	・範読を聞いて思ったこと、考えたことを生徒に発表させる。 ・大村智博士の“挑戦し続ける強い意志”を評価したものや、それにつながるものがあれば問い返し、生徒の意見を分類しながら全体で共有し、次の発問につなげる。
開	4 大村智博士の心情から考え、話し合う。 ○なぜ人は、自分にとって『厳しい道』を選ぶのだろうか。(話し合いを深める発問) ① 問いに対して自分の意見を考える ② 小グループの活動 (4人一組) ③ 全体で共有 ・自分の信念を曲げたくないから。 ・逃げたくない、後悔したくないから。 ・満足感や達成感を得たいから。 ・自分自身の成長のためだから。 ・あとで自分のためになるから。	・まず個人で考え、それに基づいて小グループで話し合い活動をさせる。自分の考えを踏まえた上でグループ活動で互いの考えから学び合うようにさせる。 ・机間指導中に話し合いが滞っている班があれば、助言や問い返しをする。 ・話し合い活動後、その活動を通して考えたこと、他者の意見から気付いたことを基に再考

	<p>5 これまで考えたことをもとに内省する。</p> <p>○自分の人生を本当の「いい人生」にするためには何が大切だろうか。また、それはなぜだろうか。</p> <p>(自分の考えを深める発問)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・強い信念をもつこと。諦めなければ目標を実現させることができるから。 ・誰かのためになることを目指せば、自分にもよいことが返ってくるから他者のために頑張る。 ・辛いこと、苦しいことから逃げないこと。立ち向かっていくことがいい人生につながる。 ・努力を怠らないこと。努力した分、よいことが自分に返ってくるから。 ・自分のやりたくないことにもしっかり向き合うことで、新しい喜びを感じることができる。 	<p>する(ワークシートを活用)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合い活動を通して考えたことを基に、ワークシートに自分の考えを記入する。 ・今後の自分自身の人生の心構えについて、深く考えさせるようにする。
<p>終末</p>	<p>6 本時のまとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の努力を評価し、挑戦することから逃げずに努力し続ける姿勢の大切さについて、教師が説話をする。 ・ワークシートに感想、自己評価を記入する。

6 本時の評価

- ・より高い目標を達成したことから得られるものの大切さを理解し、困難や失敗を乗り越えて挑戦し続けようとする気持ちをもつことができたか。
- ・多様な価値観に触れることを通して、ものの見方や考え方を広げ深めることができたか。

7 指導の実際

【小グループでの話し合い活動】

生徒たちの考えを小グループの中で示し、話し合いをしながら生徒たち自身で意見を分類し、深めることができるよう活動を行う。その活動の中で、多様な価値観に触れることで、生徒たち自身で価値観を広げることができる点において、小グループでの話し合いの活動の効果がある。さらに、小グループで話し合っただけで考えた意見を全体で共有することで、再度、発言した生徒だけでなくその他の生徒も自分の考えを深めることができる。話し合い活動の場面では、生徒に気づきがある授業展開を工夫したり、課題に対して考えたことを整理したりすることで、その後の個の内省へとつなげる展開を意識した。

T：なぜ人は、自分にとって『厳しい道』を選ぶのだろうか。

<事例1>

S1：将来成功するために、厳しい道を選んでいくと、きっとその経験が将来生かされて、成功することができると思います。

T：厳しい道を選ぶことが、成功の道なのですね。では、楽な道を行くとどうなると思いますか。

S1：立派な人間にはなれないと思います。

T：あなたが思う立派な人間とは、どんな人のことを言いますか。

S1：大村智博士のように、人の役に立つ人だったり、自分の目標を常に見失わない人だと思います。

<事例2>

S2：厳しい道を選ぶ方が、楽な道を選ぶより達成した時のうれしさが大きいと思います。

T：その先にはどんなうれしさが待っていると思いますか。

S2：達成感や満足感が、厳しい道の先には待っていると思います。

T：では、なぜ人は厳しい道から逃げたいと思うことがあるのでしょうか。

S2：今現在の苦労だけを考えて、厳しい道を歩んだ先にあるものを考えていないからだと思います。

8 発問に対する生徒の反応（抜粋）

【自分の考えを深める発問（内省）】

自分の人生を本当のいい人生にするためには何が大切だろうか。また、それはなぜだろうか。

- 生徒：○自分に厳しくできる気持ちである。自分に厳しくする気持ちをもつことで、人生の大きな困難にも立ち向かえることができるから、私も強い気持ちをもとうと思った。
- 努力が大事である。努力して何かを得たとき、ここまでやってきてよかったという達成感が味わえるし、そこからまた達成したときの喜びを求め厳しい努力ができるから。これからは辛いことから逃げずに挑戦していきたい。
- 厳しい道を歩むことができる「努力しようとする心」とそれを「実行すること」が大切である。それができれば、厳しい道を進んだ先にある喜びを感じられる。私も厳しい道を進んだ先にある喜びやうれしさを感じるために努力していこうと思う。
- 自分に誇りをもつために努力することである。私は将来「漁師」になりたいので、これからは厳しい道を選択しながら、夢を実現するためにたくさん頑張っていきたい。
- 努力が大切。厳しい道のりの中で努力を重ねることで、達成感や喜びを感じられる。

9 成果と課題

【他者の価値観から学ぶ（話し合い活動）】

(1) 成果

これまで「楽をしてはいいい人生にならない」と漠然と感じていた生徒が、他者の意見や考えに触れることで「楽な道を選んでいたら将来自分がなりたい職業につけない。だから厳しい道を選ばなければいけない」と、話し合い活動の学びから考えを深めることができた。また、一人では思考に行き詰まりが感じられる生徒も、他者の考えを取り入れることで考えを深めることができていた。「他者の価値観から学ぶ」という観点からも話し合い活動の意義があり、その後の内省では、自分にとってよりよい生き方を考えることができていた。

(2) 課題

「厳しい道を選ばなければいい人生にならない」ということについて考えることができていたものの、「自分にとっての厳しい道とは何か」については考えを十分に深められない生徒もいた。それは、話し合い活動の中で今の自分に必要なものは何かを考えるきっかけを得ることができなかったからであると考えられる。この後に、「自分の人生をいい人生にするには何が大切か」について内省するので、そこにつながるように話し合いを深められれば、さらによりよい気づきが得られたはずである。話し合い活動をより一層工夫し、継続して指導していきたい。

【主体的に判断する力を育む（自己内省）】

(1) 成果

話し合い活動で得た気づきや他者の意見を活用することで、自分の考えを深めることができた。これまでの自分を表面的に振り返ったり思い返したりすることは比較的容易でも、自己の在り方を見つめ直し、改善していこうと工夫することは容易なことではない。今まで自分が生きてきた中で確立された価値観と、話し合い活動で触れた他者の価値観とを比較したり統合したりすることで、「よりよく生きる」ということと正面から対峙し、さらに内省が深まるということ、この検証授業を通して実証することができた。人物の生き方を描いた教材を活用することは、自分自身の今後の生き方を考える上で効果的な教材であった。「厳しい道を選ぶ—大村智博士—」に関する導入として、「人のためになることをやる」、「他人と同じことをやるだけではない」、「何回失敗しても怖くない」、「神様はプリペイドマインドを持っている人に贈り物をくれる」という信念を提示することで、今回の教材からだけでは得難い人生観や価値観に気付くことができ、それを話し合い活動や自己の内省に生かすことができた結果、自分にとってのよりよい生き方を主体的に判断する力の育成につながったと考える。

(2) 課題

「より高い目標を設定し、それを達成することの大切さを理解し、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げようとする態度を育てる」ために大村智博士の生き方を提示したが、その「強い意志」をもった生き方と自分自身の生き方とを比較したときに、自分とは違う偉人の生き方として考え、自分事として考えることが難しい生徒がいた。【話し合いを深める発問】、【自分の考えを深める発問】から考えを深める中で、生徒が自分自身のよりよい生き方を見つめていくことができるよう、自分事として考えさせる補助発問を工夫することで、強い意志をもち、自己実現が可能な生き方を主体的に判断する力を養うことができるのではないかと考える。

VI 研究のまとめ

本研究では、「他者の価値観から学び、主体的に判断する力を育む道德科の授業の工夫」を研究主題とし、仮説に基づき検証を行った。以下、研究の成果と課題をまとめる。

1 研究の成果

(1) 自分と異なる意見と向き合う活動の有効性

小集団での話し合い活動を設定することで、生徒はその授業の中で、自分の意見を発表する機会を、必ずもつことができる。また、小集団の中で他者に自分の意見を伝える中で、自分の意見を再確認したり、他の生徒との対話から着想を得て、自身の考えを広げたりすることができる。また、小集団の話し合いで出された意見を全体で共有し、分析することで、再度自分の意見を振り返ったり、自分の意見を補完する意見を見つけたり、自分とは異なる価値観を認めたりする。

授業中での発言やワークシート、話し合いの様子などから、生徒が自分の意見に他者の意見を付け加えて表現したり、自分とは異なる価値観に出会ったことで気づきを得たり、他者の意見による自身の変容を感じたりしている様子を見取ることができた。こういった生徒の姿から、自分と異なる意見と向き合う活動は、生徒に自分とは異なる価値観に気付かせ、物事の新しい見方や考え方を生み出させることに有効であるといえる。

(2) 自分の考えを深める活動の有効性

話し合いで考えを深めた後に、自分自身のよりよい生き方について探求する発問を設定した。生徒は、ただ発問について考えるのではなく、他者の考えから得た異なる視点からも発問について考え、自分の今までのものの見方や考え方を再度見直すことになると考えた。

生徒の発言やワークシートからは、今回の授業を通して自身が今までもっていた考えをより強固なものにしたり、他者の意見から今までの自分の姿を見直し、今までとは違った考えをもつようになったり、自分とは異なる意見を認めようとした様子を見取ることができた。また、そうした気づきの上で、自身がよりよく生きるためには、どうすべきなのか、考えることができていた。こういった生徒の姿から、自分の考えを深める活動を通して形成された自らの価値観は、よりよく生きるための基盤となる道德性につながるものと言える。

(3) 話し合いを活性化する手だての有効性

本研究では、教師は生徒の話し合いによって出された意見を整理したり、深めるための補助発問をしたり、話し合いによって出された意見を聞いて何を感じたかを問い掛けたりと、ファシリテーターとしての役割を担った。教師が生徒の意見を引き出し、話し合いを深めることを目指したことによって、生徒それぞれが自分の生き方について考え、主体的に考える道德の授業につながった。

また、話し合いを活性化するために、小集団ごとに意見を分析させたり、全体で共有した際に補助発問をしたり、出された意見を深める工夫を授業ごとに行った。生徒の授業後の感想や発言などから、今まで考えたことがなかったことを考えた、今までと考えが変わった、といった、自身の変容を感じる様子を見取ることができた。生徒の話し合いを活性化するための手だてが生徒の考えを深めることにつながったといえる。

2 研究の課題

(1) 話し合いを深めるために

生徒の話し合いを深めるためには、生徒がそれぞれの価値観から多様な意見を出し合うことが大切である。そのため、本研究では、それぞれの価値観によって多様な考え、意見を出すことができるような発問＝「話し合いを深める問い」を設定して授業を行ってきた。生徒は、「話し合いを深める発問」によって、生徒が課題を自分事として捉え、自分の経験を振り返り、互いに学び合っている様子が伺えた。

しかし、道徳の教材の中には、生徒が自分の経験から考えることが難しいものもある。勤労や自然愛護といった、生徒自身の知識や経験が乏しい内容に関しては、道徳の授業だけで考えを深めさせるのではなく、教科の授業や特別活動等と連携した授業を計画することも必要であると考ええる。

また、生徒の話し合いをより深いものにするためには、教師のファシリテーターとしての役割が欠かせない。生徒の言葉をどのように受け止め、どのように問い返して考えさせるか、それは日々変化する生徒の心に寄り添ってこそ、実現できることであると考ええる。道徳教育推進教師を中心に、校内で研究・研修を行うなど、学校全体で道徳の授業改善に取り組み、教師も生徒とともに学び、成長していこうとする、意識や姿勢をもつことも必要である。

(1) 主体的によりよい行為を選択する

本研究では、話し合いを深める活動の後に、自分の考えを深める活動を設定している。生徒達は、話し合いの中で、他者の価値観に触れ、自分の考えを見つめ直すことができる。その結果、授業を受ける前に抱いていた考えが、より固まることもあれば、新たな視点に気づき、考えが変わることもある。そのように、自分の生き方について考えることは、今後の人生で、生徒が主体的によりよい行為を選択できるようになる。

しかし、授業の中で価値観が変容するように、生徒のものの見方や考え方は日々変化している。学校生活だけでなく、家庭生活、地域生活を通して、様々なものを得て、日々成長している。また、発達段階によっても、物事の受け止め方は変わってくる。授業の中で見ることのできた生徒の姿は、あくまでも通過点に過ぎない。

だからこそ、生徒が自身の価値観を形成し、よりよい生き方を模索し続けることができるように、継続して指導をしていくことが必要である。

平成 29 年度 教育研究員名簿

中学校・道徳

学 校 名	職 名	氏 名
世 田 谷 区 立 船 橋 希 望 中 学 校	教 諭	志津野 ゆか
葛 飾 区 立 亀 有 中 学 校	主任教諭	◎ 米澤 絵里子
町 田 市 立 木 曾 中 学 校	教 諭	齋 藤 拓 真
日 野 市 立 日 野 第 一 中 学 校	教 諭	山 寺 悠

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教職員研修センター研修部教育開発課
指導主事 土生津 静

平成 29 年度

教育研究員研究報告書

中学校・道徳

東京都教育委員会印刷物登録

平成 29 年度第 142 号

平成 30 年 3 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 康印刷株式会社